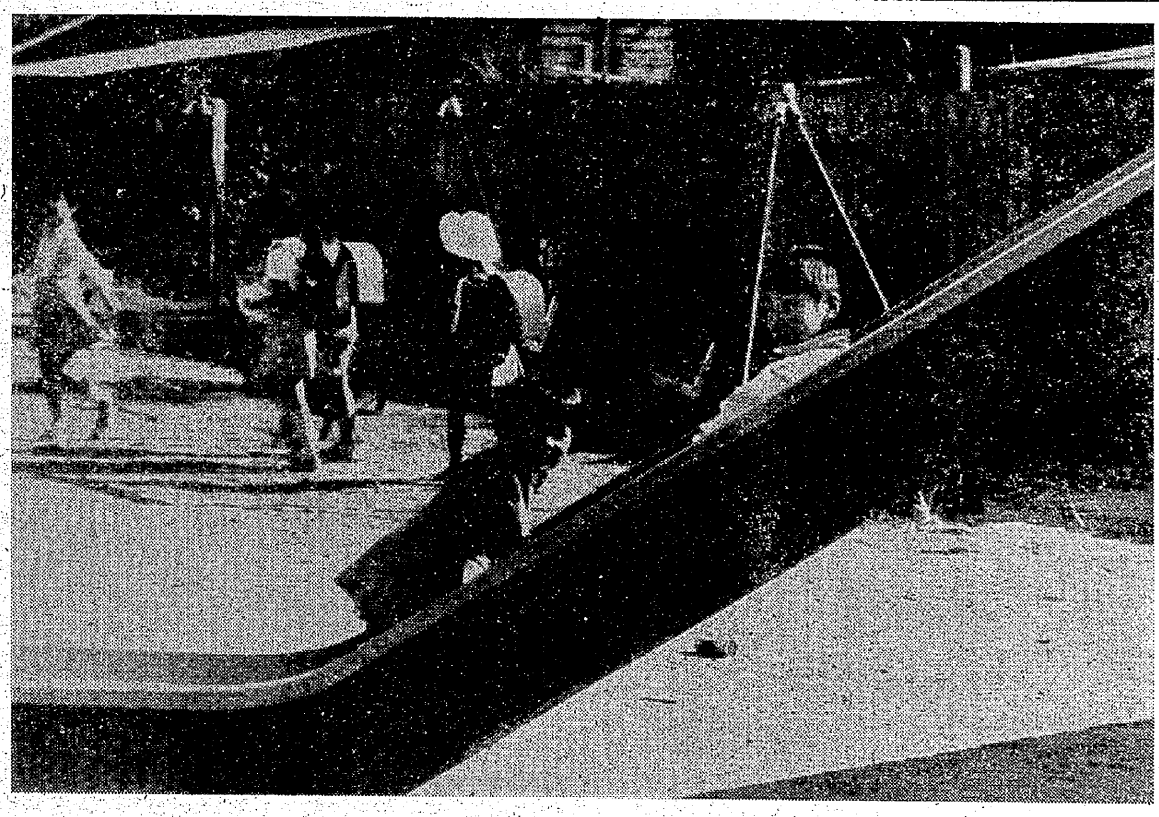

社宅の子どもたち。秋の陽射し浴びながら……。

十一月の暦

1日　灯台記念日。狩猟解禁日。
　　教育文化週間はじまる。
3日　文化の日。
7日　立冬。ソ連十月革命。
8日　世界都市計画の日。
9日　太陽暦採用記念日。
11日　世界平和記念日。
12日　特定休日。
15日　七五三。
23日　勤労感謝の日。
26日　火災予防運動。
28日　親らん上人忌。

×

まず気象庁の長期予報によりますと、移動性高気圧におおわれ、小春日和の日が多くなりそう。長雨らしい長雨はなく、前線の停滞があっても一時的なもので、晩秋は絶好の行楽日になるとのことです。（以上〝連合〟の記事）

秋季闘争が十月末日をヤマに闘われたあと、ひきつづき期末手当獲得闘争へ。

三池大災害記念日の十一月九日もやってきます。命を守るうえからも、暮らしを守るうえからも、三池炭鉱労働者にはかくべつ重大な意味をもつ十一月です。三池労組員ばかりでなく、新労組員に職組員、それから社外工の皆さんもいっしょになって闘いましょう。

（この項島記）

楽しかった敬老会の一日

飛び入りの熱演交流

温泉の湯も気に入った

さわやかな秋晴れの十月十五日三池主婦会は、敬老会を山鹿簡易保養センターで開催しました。

最近は予算の関係や、あるいは遠い所の人では思い切って参加できないお年寄りのことを考えて、荒尾市や大牟田市の老人福祉センターで開催してきましたが、昨年ごろから「カンパをしてもいいから、やっぱり先輩に感謝する意味も考えて、敬老の一日は温泉地でゆっくりして頂けるようにしてはどうか」とのうれしい意見が、主婦会の内部から高まってきました。そこで今年は班会議や全員集会などで討議して頂きました結果、みんなの暖い思いやりで三百円のカンパがきまり、ほんとうに久しぶりで温泉地に案内することができたのでした。

二台の貸切りバスとニュースカー〝はたかぜ号〟は朝早くから出発して、社宅近くの沿道に迎えに行きました。「おはようございます。今日はお世話になります」、と私たちへのご丁寧なあいさつ。お元気な足どりが、この日を楽しみに待っていて下さった様子をうかがわせ、ああよかった、せめて今日一日は、一生懸命大切にしてあげよう、との思いで一ぱいになりました。

百六名の先輩の方々に、付添いの人びとを含めて百六十名が、会場の山鹿簡易保養センターに集まりました。

一年ぶりに元気に会えたよろこびを交し合いながら、簡単な開会式となりました。

来賓や主催者の祝辞に対して、おじいちゃん、おばあちゃん方は真面目に聞き入られ、話が政治のことにおよんでも「うん、うん」とうなずきながら熱心に聞かれるお姿は、さすがに三池労組・三池主婦会の先輩の方々だなア、と心から感心しました。

あとセンター側のうたや踊りが続きましたが、その合い間におじいちゃん、おばあちゃん方をはじめ、主婦会や組合員、あるいは同席の他団体代表の方々の飛び入りがございまして、楽しい熱演の交流に時のたつのも忘れてしまいました。気がついたときは、もう帰りの時間となっていたほどです。

先輩の方々にこの日の感想を求めましたところ、「お湯がつるつるしてとても気に入った」「雰囲気がとても楽しかった」など、お答え下さいました。

私たちはこの先輩のおじいちゃん、おばあちゃん方に、いつまでも健康でいてもらい、ぜひともお金の心配がいらず、しあわせに生きることのできる社会をつくるため、主婦会運動をいっそう強めることが、これまでのご苦労に応える何よりの道であることを確認しました。

楽しそうな顔、顔……

敬老会にお供して

四山支部　中内栄子

十月十五日、主婦会主催の敬老会に大島分会からも七名の方が参加されましたので、私がついて行きました。

名産の荒尾梨や、色づいたミカンなどを見ながら、バスで一路山鹿へと向いました。いまではすっかり道も補装されていてバスも大型なのでゆれもせず、酔う人もなく、唄が飛びだしたりして楽しんでいるうちに山鹿の保養センターに着きました。

十一時より式がはじまりました。挨拶がありましたが、お年寄りの人たちに退屈させないためにも簡単にできないものか、と思いました。

十二時半から演芸がはじまるとのこと。その前にと、温泉に入りました。

お湯の中で他の分会のおばあちゃんたちが、「塩湯ならこんはずじゃったばってん、温泉じゃったけんきたい。ほんとに良かったなア」と、喜んで話されているのを聞いて「たった三百円ずつのカンパでこんなに喜ばれる。本当に良かった」と、うれしくなってしまいました。

昼食をよばれ、演芸を見て楽しい一日が終りました。午後三時にセンターをバスで出発し、帰りはあちこちで一人降り、二人降りされ、「来年もまた会いましょう」と、お互いに挨拶を交わされるのを聞いて、本当に来年も皆様にお会いできるように、と願って帰途につきました。

私までがのんびり過ごさせて頂いた敬老会の一日でした。

主婦会員みんなで炭鉱節の踊りをご披露するつもりだったのが取り止めになったのが、ちょっぴり残念でした。

組合、主婦会の執行部の皆さま、分会長さん方、大変ごくろうさまでした。

×

この欄へ、ぜひご投稿をお願いします。

編集部

◇　◇

ボヤボヤしていたら大変だ

三池炭鉱、日本一といわれた会社である。

また、労働者を重労働、低賃金でこき使うことでも有名な会社である。

この会社が、生産のため出勤率を上げようと、家庭の主婦を一同に集め、どうしたら父ちゃんの出勤を良くすることができるか、でこん談会を催すことあいなった。

いろんな話が進むにつれ――

「皆さんのお父さんに、会社から作業着を上下差し上げます。ただし坑外の人たちについては上着だけです」

それで――

「うちのお父さんは坑外に働いておりますが、同じ会社に働くから。

以上同等ではないですか」

とたずねたら、「将来坑外は事務系統だけ残す方針です。だから事務員の声を聞き、かっこいい事務服でよいのです」

これは本当にあったことですぞ。ボヤボヤしていたら、坑外切り捨てがやってきますぞ。

×

三川指導部坑外職場新聞〝はぐるま〟（十月十七日発行）から。

今も生きている、話

山本作兵衛著〝ヤマの仕事〟

八木山峠から一望のもとに見下ろせる、筑豊の町。

炭鉱全盛時代は五百二十四カ所もあったボタ山も少しずつ姿を消し、筑豊炭田もその町々とともに昔話になろうとしている。

明治以来急速な発展をとげた日本資本主義の基幹産業だった、鉄と石炭。とくに石炭産業における非人間的な労務政策は、そのままいまに続いているが。

この本の著者山本作兵衛氏は、八歳で坑内に下り、筑豊の中小炭鉱を渡り歩き、その半生はそのまま筑豊炭田の歴史ともいえる。

「足らぬ脳ミソを絞って、思いだしては書き添え書き添えした」と前文に書いている。その記憶力の確かさには舌をまく。

絵にはほんのりとした色気さえ感じられ、若々しさ、明るさは生来の楽天性によるものだろう。

かっては暗の中にとじこめられたまま、誰れも描かれなかった地の底の真実の姿を、氏によって初めて描きだされたものである。

私たち炭鉱労働者にとっては、単なる昔物語りとしてだけではすまないものがある。

（葦書房発行。上下各七百八十円。取り扱いは組合本部の中島哲朗書記）

山本作兵衛さんの著〝ヤマの仕事〟の表紙。

私の書棚

やってくるか消費税の増徴

連合の〝家庭・文化特集〟版（十月十八日発行）は、一般消費税増徴の動きが政府部内にでていることについて、警告している。

この税制がしかれると、あらゆる商品とサービスの売り上げに課税され、いまでさえ物価高なのにいっそう拍車がかかるだろう、というもの。

いうまでもなく、とくに所得の低い層の労働者にとって痛いことになりそうで、反対運動はいまのうちに。